

# 観光地“白川村”の発展過程と観光の果たす役割

谷口知司<sup>\*1</sup>，古池嘉和<sup>\*1</sup>，瀬戸敦子<sup>\*2</sup>

文化創造学部文化創造学専攻<sup>\*1</sup>，文学部観光文化学科<sup>\*2</sup>

(2006年11月8日受理)

## The Role of Tourism Development in the “Shirakawa Village” Region

Faculty of Cultural Development, Department of Cultural Development,

Major in Cultural Development<sup>\*1</sup>,

Faculty of Humanities, Department of Tourism<sup>\*2</sup>

Gifu Women’s University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

TANIGUCHI Tomoji, KOIKE Yoshikazu and SETO Atsuko

(Received November 8, 2006)

はじめに

観光が地域に与える影響は、地域のイメージアップ、経済的波及効果など大きなものがある。しかし、“観光”という近代化現象は、時に、地域の文化に対して、多大な影響を与えることになる。白川村では、合掌造り集落の様式を守るために、観光立村を目指し、国の文化財指定である「重要伝統的建造物群保存地区」として保存・伝承することにも成功した。その意味で、“観光化”は、地域固有の文化の保存や活用に対して、大きく貢献したのではないだろうか。

今日、それらの生活様式は、世界遺産としての価値を有するものとして評価され、登録された。だが一方で、観光的価値が飛躍的に高まると同時に、広域的な交通整備などの近代化促進要因が加速化したことで、白川郷における近代化も早まり、本来の世界遺産的価値は、徐々に失われようとしている。

こうして見ると、一旦は固有の文化の保存・伝承を、観光により成功を収めたかに見えた

白川郷合掌造り集落は、再び、加速化した観光と言う近代化現象に押しつぶされようとしている。

同じく観光化現象でありながら、1970年代の観光化現象と、今日の現象とは、どのように異なるのであろうか。また、今日の観光化現象は、再び、固有の文化の保存・伝承に寄与する仕組みとして転換できるのであろうか。本稿で明らかにしてみたい。

### 1. 白川村“合掌造り集落”の概要

世界遺産に登録された合掌造り集落地区は、岐阜県白川村荻町、富山県平村相倉、同県上平村菅沼の3集落である。この章では、事例対象である岐阜県白川村荻町合掌集落についての概要を述べる。

#### 1.1 地理的特徴と合掌造り

白川村荻町合掌造りは、『荘川沿いに広がる標高500メートル前後の平坦地で、主要部は南北長さ約1500メートル、東西最大幅約350メートル、広さ約45.6ヘクタールの区域(新編 白川村史 下巻)』である。荻町集落の周

りは、白山を中心に山々に囲まれており、1950年代までは同地区へのアプローチは多くの時間を必要とし交通機関も発達していなかった。そして、日本有数の豪雪地帯としても有名な土地柄を持つ。こうした地理的な要因により、近代化の進捗速度は低下し、人々が「秘境」と呼ぶに相応しい、独自の文化や伝統を醸成してきたのである。

一方、白川郷は、日本でも有数の山間の豪雪地であり、平地が少ないため、貴重な生産手段である農地を削り、敷地を広く取り家を建てることはできない。同時に、冬の積雪とその除雪作業に多くの労働力が要することを考えると、建物の棟数は少ない方がいい。そのような考え方からこの地区に合掌造りが生まれたのである。

### 1.2 歴史的経緯と合掌造り

岐阜県白川村荻町合掌集落における合掌造りはどのようにして誕生したのであろうか。合掌造りは江戸時代中期、西暦1700年前後から明治・大正・昭和30年にわたり、およそ250年の間に建てられた。元々、合掌造りとは「庶民の民家」であり、庶民の住む場所・働く場所・生活する場所である。民家には、地域色が強くまた時代性も現れやすい建物であると考えられる。そのことは、以下の二点で生活様式、生産様式に既定された構造的特徴を持っている。

真宗を厚く信仰する人々の生活様式であること<sup>1)</sup>

地場産業であった養蚕を屋根裏で飼う家屋であること

これらのことから、白川村の合掌造りの建築構造上の特徴は、生活様式や生産様式などの文化に規定されたものであり、建築様式だけが単体として評価されるものではない。例

えば、荻町を含む白川村の地場産業が養蚕であったことは、広く知られている。養蚕は、江戸末期から明治・大正期に最盛期を迎えたが、それに伴い合掌造りの形式も変わってきた。自給自足生活であった白川村は、民家である合掌造りで蚕を飼うようになった。そのため屋内環境を変える必要があり考えた末、広い床面積と養蚕に適した屋根裏を作り出したのであり、生産様式と建築様式は表裏一体の関係にあると言えるのだ<sup>2)</sup>。

### 2. 集落の相互扶助制度

次に、集落における相互関係を見てみよう。白川郷の生活様式、生産様式には、目に見えない地域の了解(約束事)がある。その代表的な仕組みが「結」の制度であろう。前近代的な相互扶助システムとして、機能していた「結」の制度は、特に、屋根の葺き替えなど、お互いに支えあいながら生活する制度的枠組みとして機能してきたのである。

しかしながら、近代化の流れとともに、共同体としての暮らしの約束事は、徐々に崩壊していく。現在では、その代表的営為である、屋根の葺き替えに至っても、業者やボランティアが中心となっている<sup>3)</sup>。

こうして緩やかな流れではあるが、確実に、近代化が進む中で、前近代的な生活様式は崩れ、また生産様式としての養蚕も、近代化とともにその姿を変えることとなる。集落の間にあった主体的な相互扶助システムである「結」のような制度は、信頼の基盤の上に醸成されていると言える。

### 3. 主体的な観光地形成過程 村民による保存運動期

白川村の保存運動が盛んになった時期は、大正時代に約300棟あった合掌造り家屋は1961年には191棟に減少している。こうした

危機感から、地域の有志が自発的に保存活動に動き出したのである。1960年代は、観光として訪れる人も少なく(1966年度で121千人に過ぎない)、外部との交流のないまま維持・保存することが困難な状況にあった。

そこで、荻町住民有志(かつての青年部リーダー)が「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」を結成した。主体的・自発的・内発的な母体形成が起きたのである。その後の活動を見ると、昭和46年(1971年)に、合掌造り家屋の保存のため市民憲章「荻町集落の自然環境を守る住民憲章」を採択することとなる。そこでのスローガンは、地区内の資源(合掌家屋、屋敷、山林、農耕地、立木等)を「売らない、貸さない、壊さない」ことであり、売り渡す予定であった資産は、村の共有財産としての理解を求めたのである。

換言すれば、これらの活動を通じて、集落の共有財産としての意識を醸成したとも言え、結果的に社会関係資本の再構築が行われたと評価できるであろう。

こうした意識の醸成の元に、1976年に、「重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建)」に指定される。言うまでもなく、重伝建指定には、地域の所有者の合意が必要である。制度は、運動に支えられているのである。

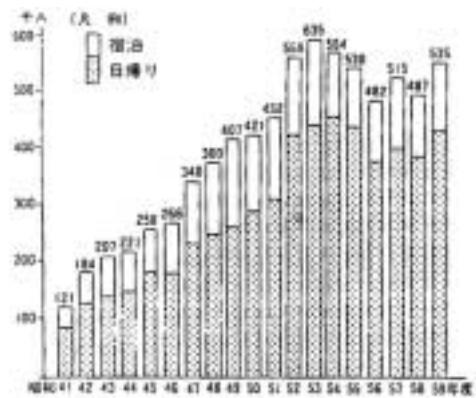
このようなまちづくり運動が、長野県南木曾町(妻籠・馬籠宿)の保存運動から始まり、全国的に地域の内部から運動体として内発的に展開し、それが契機となって制度化した流れを汲んだ動きであると評価できる。

さらに、白川村では、合掌造りの保存だけに留まらず、廃屋になった合掌造り家屋を移築保存し「白川郷合掌村(昭和47年)」として開園するなど、地域資源の活用運動が生まれるようになる。

では、この時期の白川村の活動の考察を試みよう。ここでは、次のような評価ができ

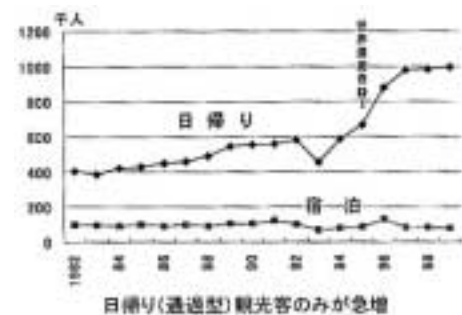
るのではないだろうか。

- (1) まちづくり運動の主体として、地域の内部に母体的組織が形成されたことで、主体的な意識(当事者意識)の元で、観光化が推進された。
- (2) 観光地形成を運動論として捉え、ホスト側の一体感が強化される中で、地域の文化的資源を再評価し、現代的意味の結の精神を強化していった。
- (3) 運動論は、住民憲章という制度に発展し、運動論と制度論が一体化する中で、



(参考) 図1 昭和40年代以降の観光客数の推移(千人)

(出典) 遺産の所有と利用に関する観光文明学的研究」第2回研究会資料より抜粋



(参考) 図2 白川村における観光客数の推移(千人)

(出典) 遺産の所有と利用に関する観光文明学的研究」第2回研究会資料より抜粋

内発的に制御しながら、観光地形成が行われていった。

- (4) 地域の中で運動を展開する中で、社会関係資本の蓄積が進み、ホスト側の一体性が醸成された。

#### 4. 世界遺産登録とその効果の受け止め方

観光地として成長・成熟してきた白川郷の観光客数は、1980年代も年々、漸増傾向あった。そして、1995年に、ユネスコ世界遺産に登録(1995年12月)され、1977年に保存財団が発足する。勿論、「世界遺産」とは、決して観光による地域の活性化のために登録されるのではなく、国際的に協力し合いその価値ある遺産を後世に伝えることに意義がある。そのことは、ホスト側である地域住民にも一定程度は理解されていると言えるだろう<sup>4)</sup>。しかし、世界遺産ブランドとして地域の認知度が高まることで、結果的に観光客は急増することとなる。また、観光により直接的・間接的な収入が得られ、観光による経済的波及効果が目に見えてくるようになると、地域としては、地域経済発展の切り札としての役割に強く目が向くようになる。

#### 5. 観光地の発展過程と観光の役割

これまで考察してきたように、観光化することは、近代化の進展と深い関係にあると言える<sup>5)</sup>。

勿論、上記の「観光化すること」に対しては否定的な見方もある。例えば、E.J. ミッションは、観光客の過密と混雑により膨大なコストが発生し、自然美保護に注意を向ける人々との利害対立を生むことなどを指摘し、拡大する現代観光に限界点があると述べている〔mishan. E (1969) *The Cost of Economic Growth*, p140〕。

自然や文化の貴重な資源の保全と、観光に

よる資源の消費行動には、相反する面もある。それは、今日の白川郷のように、観光化を無制限に受け入れ、“観光公害”を生むような事態にまで陥るようになり、集落の静かな環境までもが喪失するようになると、世界遺産としての文化的価値や自然景観などを保存する側の価値観と対立は深刻化し、ミッションの指摘するように、観光の負の部分がかろうぜアツプされるようになる。

これは、本稿で考察したように、観光地としての成長過程を検証する中で見ると、1970年代の内発的成長期との比較の上で、現在の状況は明らかに飽和状態にあることに起因していると言える。

一方、本研究では、観光そのものが地域文化にとって「害悪」になる危険性を孕むものではあるが、観光地としての成長過程を地域(ホスト側)が適切に管理していくことで、文化の保護・活用・伝承に寄与することも示してきた。

1970年代の観光地形成のキーワードは、地域内(ホスト間の)相互関係の強化の上に成り立っていた観光化の過程であり、「まちづくり運動」として、共同体の運動体的一体感の中で、観光地形成を行ってきたことの評価の上に成り立っている。そして、運動体としての機運の盛り上がりは、制度化へと進み、まちづくり型(内発的)の観光地形成が進む。このような、まちづくり型の観光地形成に対して、1995年(世界遺産登録)以降の観光地形成を見ると、外部からの観光客を無条件に受け入れ、観光客を受け入れることと集落の紐帯が強まる仕組みが一体化してこなかった。すなわち、世界遺産登録後の観光現象は、世界遺産登録の趣旨と離れ、観光客が急増する中で、地域における内発的な制御機能を失っているのだ。それは、膨大な観光客の増加により、主体的に制御する力量を超えた現

象が起きているとも言える。

そのため、現在では、外部の力も借りながら、社会実験として交通システムの検討が行なわれているが、こうした量的管理が重要である。あるいはゴミ対策、景観保全等適切な観光地の成長管理を行い、世界遺産としての価値をホスト・ゲスト双方が共有化する仕組み等も検討していかなければならない。世界遺産登録による急速な観光化は、地域が体験したことの無い状況を生み出し、その中で、固有の文化的価値を喪失し、コミュニティの紐帯は弱まり、自らの地域の価値自体を見失うこととなる。その制御は、地域の内発的な力にのみ期待するだけでは、困難であろう。外部の力も借りながら、今日的なまちづくり活動が生まれ、観光との良好な関係を構築していくことが求められるであろう。

#### 注

- 1) およそ250年の間にいくつもの合掌造りが白川村・五箇山地方で建てられたが、初期の合掌造りは、真宗の道場としての性格を強くもち、この時代帰属住宅の様式であった書院造の影響はほとんど受けていない。しかし、時代が変わり江戸時代末期までには、「仏間座敷」に付属する坊主の控え室として床の間や違い棚など座敷飾りを備えた書院座敷が導入されていたことが分かっている。
- 2) 合掌造りは屋根裏が広いことが特徴である。そして、その広い屋根裏を何層にも区切っている。二層の場合も三層の場合もあり、小屋組の部分を、二階なり三階なりの形にして屋根裏を積極的に利用して

いる。

- 3) 岐阜大学(合田教授)の調査によれば「1940年におけるX家の屋根葺き替えの結は、66名の手伝いがあったが、今日では、業者が少数の手伝いとともに行なわれている」ことが確認されている。
- 4) 当然ながら、地元でも、世界遺産の文化伝承が第一義的に既定されている。例えば、『世界遺産条約の目的は、「世界のすべての人に関係するような、きわだって普遍的な価値を持つ遺産を保護するために、その重要性を世界に呼びかけるとともに、国際協力を促進すること」にある』(新版白川村史 下巻)として、住民への啓蒙を行なっている。
- 5) 例えば、前田によれば、観光は、『自由裁量所得、余暇時間、情報などの増大、さらに、交通機関の発達・宿泊施設の整備などを条件として成立したきわめて近代的な社会現象』であるとしている(『観光概論』引用)。

#### 参考文献

- 『新編 白川村史 下巻』、『新 白川村史 中巻』、ユネスコ世界遺産年報2006  
J. アーリ 『観光のまなざし』加太宏邦訳、法政大学出版局、1995年  
E. J. ミシャン 『経済成長の代価』都留重人監訳、岩波書店、1971年  
バレーン・L. スミス 『観光・リゾート開発の人類学 ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』三村浩史訳、勁草書房、1991年  
『地域経済学』宮本憲一・横田茂・中村鋼治郎編、有斐閣ブックス、1990年